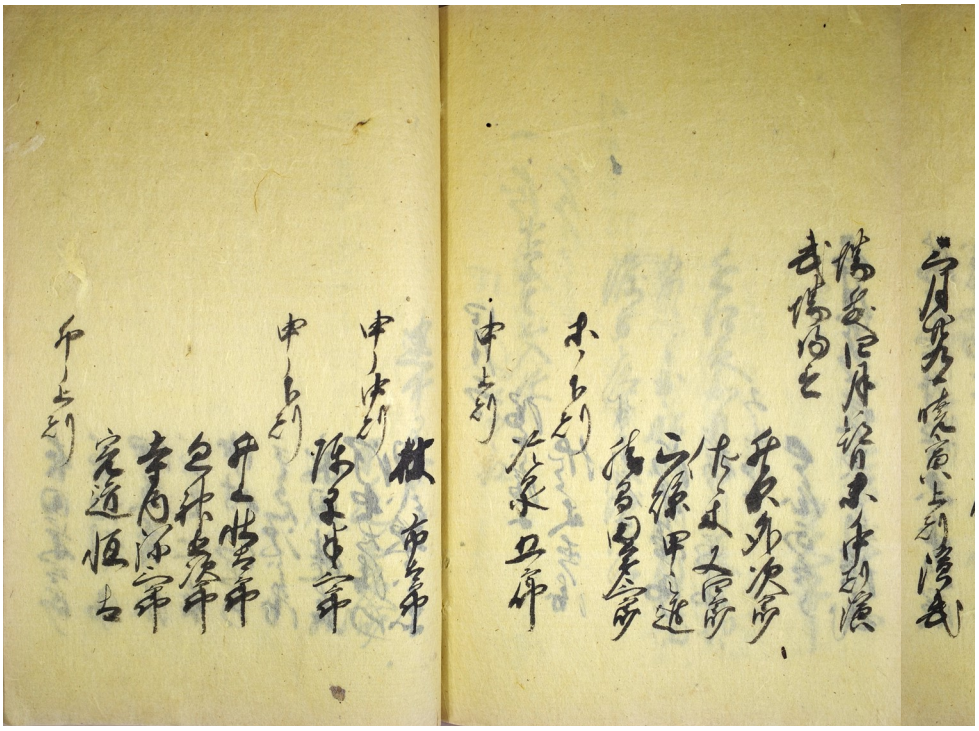


「明倫館御用掛日記」（毛利家文庫15文武105）

➤ 8

きたえる ⑧

幕末期の長距離走「遠足（とおあし）」

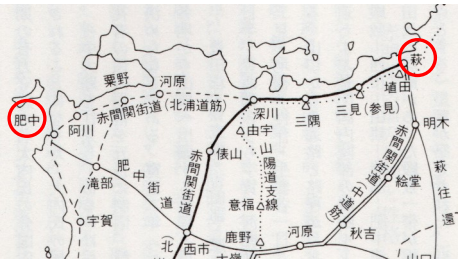
萩藩では、安政2年（1855）3月29日に、明倫館演武場を発着点とし、肥中番所（現下関市豊北町）を折り返しとする長距離走「遠足（とおあし）」が行われました。「明倫館御用掛日記」にその参加者名と着順が記され、関連する史料が「浦日記」（毛利家文庫71藩臣日記2）、「井原日記」（同3）、「両公伝史料」に残されています。この遠足がどのようなものだったか、これらの史料から窺ってみましょう。

《日時は？》

安政2年3月29日暁寅上刻スタート。これは、西暦に換算すると5月15日にあたり、午前3時すぎの出発です。「浦日記」や「井原日記」によれば、この日は晴天で、ちょうど初夏の日差しが強くなり、気温も上がってくる長距離走には少し苦しい時期でした。

《コースは？》

明倫館から肥中番所までの経路は詳しく書かれていませんが、赤間関街道の北浦道筋を通ったと考えるのが自然です。これは現在の国道191号線とほぼ重なり、距離にして片道およそ55km、往復110kmの長丁場でした。 現在各地で行われているウルトラマラソンや、夏の風物詩になっている24時間テレビのチャリティーマラソンに匹敵する距離です。



『歴史の道調査報告書赤間関街道』より

《参加者および結果》

走者は20名で、「明倫館御用掛日記」には結果のみ記されています。先頭の到着は翌4月1日の午後2時ごろでした。

「御国廻御行程記」
（毛利家文庫30地誌57）

この遠足で通った道は、赤間関街道の北浦道筋と考えられますが、これは江戸時代の街道絵図「御国廻御行程記」に描かれている道とほぼ一致します。「御国廻御行程記」に記された藩主の領内巡視の道順は萩から時計回りですが、今回の遠足は萩から反時計回りに肥中に行っています。ただし、阿川から肥中の間のルートが少し異なっています。

走者の一覧は次の通りです。〈　〉内は安政2年の「分限帳」などから推定した年齢です。

●3月29日

【寅上刻出発（午前3時すぎ）】

●4月1日

【未ノ中刻到着（午後2時ごろ）】

① 井原外次郎

② 佐々木又四郎〈18才〉

③ 山県甲之進

④ 勝間田多三郎〈19才〉

【未ノ下刻（午後3時まえ）】

⑤ 冷泉五郎〈15才〉

【申ノ上刻（午後3時すぎ）】

⑥ 林市太郎〈17才〉

【申ノ中刻（午後4時ごろ）】

⑦ 諫早半三郎〈24才〉

【申ノ下刻（午後5時まえ）】

⑧ 井上壮太郎

⑨ 廻神直次郎

⑩ 寺内孫三郎〈21才〉

⑪ 宍道恒太〈23才〉

●4月2日

【卯上刻（午前5時ごろ】

⑫ 吉田栄太郎〈18才〉

⑬ 兼常剛之介〈21才〉

⑭ 伊藤晋作〈32才〉

⑮ 兼重仁吉〈33才〉

⑯ 中村仁右衛門

⑰ 重見次郎兵衛〈30才〉

⑱ 永田健吉〈24才〉

⑲ 河野右衛門〈29才〉

⑳ 祖式次郎兵衛

◎途中監視　末近兼次郎

◎途中監視　進藤又蔵

これを見ると、走者の年齢は10代から30代で、まず井原外次郎を始め4名が翌4月1日の未中刻（午後2時ごろ）トップ集団でゴールし、その後順次到着。さらに翌4月2日の早朝に9名が帰り全員がゴールしました。上位集団には10代の若者が目立ちます。

《レース展開は？》

途中のレース展開は詳しくは分かりませんが、「井原日記」にこの遠足の概略が書かれています。

・岡部（槍術師家）の門弟と内藤（剣術師家）の門弟が遠足に参加。

・井原の息子、外次郎も誘われ、28日夜五ツ過（午後8時ごろ）、明倫館へ出かけた。

・寅上刻（午前3時すぎ）、伍を組み繰り出す。

・正明（現長門市）あたりで夜が明けた。

・昼過ぎに肥中到着。

・折り返し、八ツ過ぎ（午後2時すぎ）に阿川到着。

・翌朝、阿川を発つ

〈◎井原外次郎は未ノ中刻（午後2時ごろ）トップでゴール〉

・夜四ツごろ（午後10時ごろ）帰宅。

萩を未明に出発し、昼過ぎには肥中に到着しています。そこで折り返し阿川へ。阿川が一日目のゴールだったようです。翌4月1日早朝、阿川を発ち、未ノ中刻（午後2時ごろ）に明倫館に到着しました。

この遠足のペースを推測してみると、午前3時ごろ出発し、肥中で折り返し阿川に午後2時ごろの到着ですので、約60㎞を約11時間。平均時速5.5㎞/h。ただしこれは途中の休憩時間を考慮していませんので、速度としてはジョギングぐらいのイメージでしょうか。ただし、スタート直後の萩・長門間は1時間に約10㎞のハイペースです。現在のマラソン選手のようなランシャツ、ランパン、ランニングシューズを履いて舗装された道を走るわけではなく、わらじに袴、そして刀を差して山道を走るのですから大変だったと思われます。

《幕末維新の動乱期の中で》

「井原日記」では、この遠足を「防御のための足慣らし」と記し、「一昨々年」ごろから「健歩」が盛んになったと伝えています。遠く響灘の海上を見渡せる肥中が折り返しであったことからも、外国を警戒しての士気高揚が狙いであったことを窺わせます。

実は、この遠足の上位5名のうち３名が、幕末の動乱期に命を落としています。日頃から道場で心身を鍛えていた彼等は、間違いなく、身体能力に優れたアスリートだったことでしょう。優れた身体能力を持つ彼等であったからこそ、戦場での活躍が期待され、自然、過酷な運命に陥りやすかったのではないでしょうか。